

VI) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
イネ	いもち病	葉いもち やや遅 い、 穂いもち 平年並	葉いもち やや少、 穂いもち 平年並	葉いもちの初発生は6月19日とやや遅く、全般発生は6月第6半旬と平年並みであった。その後の病勢進展は総じて緩慢で、梅雨明け以降、急速に衰えた。7月下旬の発生圃場率は12.9%（平年33.0%）、発病株率が5.3%（平年18.9%）となり、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。穂いもちの初発生は8月3日と平年並みであった。初期の発生量はやや少なかったが、8月中旬以降病勢がやや活発化した。8月下旬の発生圃場率は14.5%（平年23.9%）、発病率は1.3%（平年1.4%）となり、全般の発生量は平年並みとなった。	6月第3～6半旬までBLASTAMによる感染好適日が県内各地で出現し、アメダス観測15地点における出現回数は21回（平年19回）とほぼ平年並みとなった。梅雨明け以降は、概ね降雨頻度が低く、高温で経過したが、7月第5半旬以降は感染好適日の出現回数が平年をやや上回って推移した。特に8月第4半旬以降、降雨頻度がやや高くなり、気温も低下したため、感染好適日が27回と頻繁に出現し（平年11回）、8月の出現回数としては過去10年でH21年と並び最も多くなり、穂いもちの発生に助長的に作用したものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ薬剤散布が行われた。
	紋枯病	遅い	少ない	初発生は平年よりも7日遅く6月23日に認められた。病勢進展は極めて緩慢で、例年、上位進展が活発な極早生種栽培圃場でも、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ圃場はあまり認められなかった。主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は、発生圃場率8.6%（平年34.9%）、発病株率1.0%（平年6.3%）と、平年に比べて少なかった。	最高分けつ期の前後、降雨量が少なく経過し、また、中干し等、適正な水管理が徹底されたことから、株間湿度が低下し、全般にわたって病勢進展が緩慢になったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	縞葉枯病	—	平年並	6月16日に極早生種ハナエチゼンで初発が確認された。この後、各地でゆうれい症状を呈する発病株が認められたが、1圃場当たりの発病株数は数株程度であった。巡回調査における発生圃場率は0.6%で、やや多かったH21年度の1.7%、22年ぶりに広域的多発生となったH20年度の16.9%と比較すると顕著に低下し、全般の発生量は平年並みとなった。また、再生稲における発病株率も前年同水準の0.1%となり、H21年度の1.9%、H20年度の29.6%を大きく下回り、立毛時の発生状況を反映した結果となった。	4～6月に捕獲されたヒメトビウンカの保毒虫率は1.3%で、本病の発生量のやや多かった一昨年度の6.2%と比較して低かった。また、ヒメトビウンカの越冬世代～第1世代の発生量が平年並みに留まったことから、本病の発生量は一昨年度に比べて減少し、平年並みになったものと考えられる。	H20年度あるいはH21年度に、縞葉枯病が多発生した地域では、箱施薬剤等による媒介虫のヒメトビウンカに対する防除が行われた。
	もみ枯細菌病	—	多い	出穂期の遅い品種を中心に県内各地で発生が認められ、一部の自家採種圃場では発病程度の極めて高い事例も確認された。	8月第4、5半旬に降雨頻度が高く、この頃に出穂期を迎えた品種では感染が助長されたものと考えられる。また、発病程度の極めて高かった自家採種圃場においては、化学農薬による種子消毒が未実施であったため、汚染種子由来の病原細菌により苗が高率に感染し、本田での多発生に繋がったものと推察される。	採種圃場においては薬剤感受性検定に基づき選定された薬剤による種子消毒が実施された。
	苗立枯病	—	やや少ない	県内各地で発生が認められたが、発病程度は低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	予防的な薬剤処理が行われた。
	セジロウンカ	やや早い	少ない	予察灯での初飛来は平年に比べてやや早い6月26日に認められたが、その後の飛来は極めて少なく経過した。現地圃場においても成幼虫の発生は極めて少なく、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	飛来量が少なかったため、発生量が少なくなったものと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。

	トビイロウンカ	—	少ない	予察灯において6～7月は飛来が確認できなかった。現地圃場においても成幼虫の発生は極めて少なく、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	飛来量が少なかったため、発生量が少なくなったものと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	平年並	極早生品種出穂時（7月下旬：8.3頭/20回振・81.0%、前年1.7頭・50.0%）の調査では発生量は平年並み、早生品種出穂時（8月上旬：3.0頭/20回振・58.8%、前年2.1頭・56.5%）の調査では発生量は平年に比べてやや少なく、全般の発生量は平年並みで経過した。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。	発生要因として、昨年の発生量は平年並みで、越冬量も平年並みであったと推察される。	7月27日に臨時情報を発表し注意を喚起した。発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。カメムシ防除を兼ねた長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。
ムギ	さび病	—	やや少ない	コムギでは収穫期に発生が確認されたが、発病程度は低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
	赤かび病	—	多い	5月下旬における発生量は発生圃場率が18.6%（平年3.1%）、発病率は0.2%（平年0.08%）と平年に比べて多かった。	4月下旬以降、降雨頻度が高く、高温傾向となったため、子嚢の飛散および感染が助長されたものと考えられる。また、梅雨入りが早く、一部で倒伏被害や刈り遅れを生じたことも助長要因と考えられる。	ムギの種類に応じて出穂期以降、薬剤散布が実施された。
	うどんこ病	—	やや少ない	病勢は緩慢で、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	近年発生が少ないことから、伝染源量が少ないものと考えられる。	他の病害との同時防除が行われた。
ダイズ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。圃場での幼虫の発生は平年並みの8月第4半旬からみられ、当初やや少ない発生であったが、その後増加し、9月末には平年並みの発生となった。	成虫の飛来量は当初やや少なかったが、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。また、9月の天候は気温が高く本種の増殖には好適であったが、降水量が多かったため若齢幼虫の死虫率が高くなり、平年並みの発生になったものと思われる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
ナシ	黒斑病	遅い	少ない	初発は5月8日で平年と比べて遅かった。5月下旬までは平年並みで推移したが、6月下旬以降は平年と比べて少なく推移した。	近年、発生量が少ない傾向が続いているため、越冬菌量が少なかったと考えられる。	袋かけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	遅い	やや多い	初発は5月9日で平年と比べて遅かった。5月下旬までは平年並みで推移したが、6月下旬以降は平年と比べてやや多く推移した。	近年、発生量がやや多い傾向が続いているため、越冬菌量が多かったと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に薬剤防除が行われた。
	ナシヒメシンクイ	やや遅い	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや遅かった。誘殺数はすべての世代で平年並みとなった。果実の被害は全般には平年並みであった。	3月中下旬、4月は気温が低かったため、越冬世代成虫の発生時期はやや遅かった。越冬量は平年並みで、気温の変化は大きかったもののその後の発生量も平年並みになったと思われる。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	モモシンクイガ	やや遅い	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや遅かった。誘殺数、果実被害は全般に平年並みであった。	前年の発生は平年並みで、越冬世代成虫の発生量も平年並みと考えられる。春先の気温が低く推移したため発生時期はやや遅くなった。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなった。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。
	ハマキムシ類	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代でやや遅かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低く、越冬世代の発生時期はやや遅かった。その後、気温の変化が大きく全体の発生量はやや少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。

	ハダニ類	平年並	平年並	ハダニ類の発生量は4月下旬の花叢への寄生率は平年並みであったが、その後、5月に発生が多くなったが、6月以降は平年並みとなった。全般の発生量は平年並みの発生となった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、4月下旬にクワオオハダニの花叢への寄生がみられ平年並みとなった。その後、5月の気温が高く、発生量が一時増加したが、梅雨入りも早く降雨が多くなり、発生量は平年並みとなった。その後は平年並みで推移した。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	クワコナカイガラムシ	—	やや少ない	全般の発生量はやや少なかった。	—	防虫果袋が使用された。
	アブラムシ類	やや遅い	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや少なく、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度とも平年並みとなった。全般の発生量はやや少なかった。	4月中旬の気温がやや低く経過したため、発生時期がやや遅く、4月下旬の発生がやや少なかった。その後、平年並みとなったが、降雨等の影響により全体の発生量はやや少なく推移したものと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。
カキ	炭疽病	早い	やや多い	5月下旬に新梢で初発を確認した。また、7月下旬に果実での発病が確認され、平年と比べて早い時期での発生となった。全般の発生量は平年と比べてやや多かった。	5月以降6月中旬まで降水量が多かったため、早い時期に発病が助長されたと考えられる。また、8月下旬以降も降水量が多く発病が拡大したと考えられる。	梅雨時期と8月下旬～9月を中心に薬剤散布が行われた。
	うどんこ病	平年並	やや多い	6月下旬に初発を確認した。発生量は、8月下旬までは平年並～やや少なかったが、9月以降発生量が増加し、平年に比べてやや多くなった。	8月下旬以降に気温が低下し、発病が助長されたと考えられる。	5月～梅雨時期、8月下旬～9月に薬剤散布が行われた。
	円星落葉病	やや遅い	やや少ない	一部多発園も見られたが、全般の発生量は平年と比べてやや少なかった。	近年、発生量が少ない傾向が続いているため、越冬菌量が少なかったことと、薬剤防除が徹底されたためと考えられる。	5月～7月に薬剤散布が行われた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カメムシ類	平年並	少ない	フェロモントラップでは5月14日に、予察灯では5月11日から誘殺された。その後、フェロモントラップ、予察灯ともに誘殺数は少なかった。	昨年はヒノキ毬果が少なくカメムシの越冬量は少ないと考えられた。本年はヒノキの花粉飛散量から毬果はやや多いと考えられ、圃場への飛来時期は遅く、飛来量は少ないと予測された。	フェロモントラップ、予察灯の誘殺数から7月中旬から8月下旬まで定期的に薬剤による防除が行われた。
	カキクダザミウマ	やや遅い	平年並	5月15日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第3半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年並みであった。果実被害は7月中旬からみられたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量はやや少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
夏秋キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	巡回調査地点での発生量は生育期間全般を通じてやや少なかった。	台風により冠水被害を受けた圃場も認められたが、食葉性害虫等による葉の傷害も少なく、感染機会も総じて限定的であったものと推察された。また、近年の傾向として発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量の減少も発生の抑制に繋がっているものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	やや少ない	収穫期には発生が認められたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	結球期に降雨が少なく、感染がやや抑制されたものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	—	やや少ない	幼虫の発生量は全般にやや少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、9月下旬には寄生株率が7.0%とほぼ平年並みとなった。全般の発生量は平年並みであった。	成虫の飛来量は当初やや少なかったが、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。また、9月の天候は気温が高く本種の増殖には好適であったが、降水量が多かったため若齢幼虫の死亡率が高くなり、平年並みの発生になったものと思われる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。

冬キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	発生圃場は僅かで、発病程度もやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量が減少し、発生が抑制傾向にあるものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	やや少ない	県内各地で発生がみられたが、発病程度はやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	—	やや少ない	幼虫の発生量は全般にやや少なかった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬までやや少なかった。その後、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。圃場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、9月下旬には寄生株率が7.0%とほぼ平年並みとなった。全般の発生量は平年並みであった。	成虫の飛来量は当初やや少なかったが、9月1半旬と4～6半旬にやや多い飛来があった。また、9月の天候は気温が高く本種の増殖には好適であったが、降水量が多かったため若齢幼虫の死亡率が高くなり、平年並みの発生になったものと思われる。	定植時の粒剤施用と、その後は発生に応じて薬剤散布が行われた。
タマネギ	白色疫病	—	やや少ない	3月には県内各地で発生がみられたが、発病程度の低い圃場が多く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。4月以降は、例年どおり気温の上昇に伴い病勢は鈍化し、4月下旬にはほぼ終息した。	発生が活発化する3月には気温が低く推移したため、病勢が抑制されたものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	べと病	—	やや少ない	3月下旬における越年罹病株の発生量は1.3株/1万株と過去10年で最も高くなった前年の1/10程度となった。その後、二次感染株の発生が県内各地で認められ、生育期後半には発病程度の高い圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	越年罹病株の発生がやや少なかったのは10～11月の降水量がやや少なく、育苗期間中の感染が抑制されたものと推察される。	越年罹病株の抜き取りや発生に応じて薬剤散布が行われた。
	さび病	—	平年並	収穫期に発生がみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
イチゴ	灰色かび病	—	やや多い	県内各地で発生が認められ、発病程度のやや高い圃場も散見され、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	3月上旬～4月下旬まで最低気温が低く推移したため、換気が十分にできず、高湿度条件が長時間継続し、発生が助長されたものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般に少なかった。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数はやや多く、本種の発生には助長的であった。しかし、定植時に本種に卓効の薬剤が使用されたため、発生量は少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。